

第6部 総合診療医の活動に関するモデルとなる事例集

東京と兵庫における「モバイル屋台 de 健康カフェ」の実践： 総合診療医が行う新たなアウトリーチ・モデル

孫 大輔¹

要旨

地域志向性ケアの一つのあり方として「モバイル屋台 de 健康カフェ」プロジェクトを紹介する。総合診療医と多職種が協働し、東京の「谷根千」地域と、兵庫県豊岡市でモバイル屋台によるアウトリーチ活動を実践した。モバイル屋台は健康無関心層へのアプローチや多世代がつながる場として、「小規模多機能」な機能を発揮する可能性がある。コーヒーや屋台といったカジュアルな装置をきっかけとして、そこでのコミュニケーションは健康や医療そのものではなく、屋台に対する興味など日常性から発生していた。こうしたアプローチを今後、総合診療医が積極的に行うことで、地域住民とのパートナーシップ形成や、多職種との「顔が見える」連携がとりやすくなる効果が期待できる。

1. 事例の概要

①取り組みの背景

総合診療医にとって、地域志向性ケア（Community-Oriented Care）は必須の活動である。その際、地域住民とパートナーシップを形成し、ゆるいつながり（ソーシャルキャピタル）を強化することの重要性は強調されている。今回、我々は、総合診療医や医学生が街で移動式屋台をひき、コーヒーなどをふるまいながら地域の人と健康生成的なコミュニケーションをとるという活動を実践した。この「モバイル屋台 de 健康カフェ」プロジェクトについて紹介し、その効果について考察してみたい。

②事例の詳細と成果：東京「谷根千」地域におけるモバイル屋台 de 健康カフェ

東京に「谷根千」と呼ばれる地域がある。台東区谷中および文京区根津・千駄木にまたがる、住民により名付けられた地域である。総合診療医である筆者らは、この谷根千地域を対象に、地域住民と医療系専門職・研究者の協働により地域の人々のウェルビーイング向上を目的とした「谷根千まちばの健康プロジェクト（まちけん）」を2016年より

行っている¹⁾。ウェルビーイング（well-being）とは、Seligmanによれば「元気で活躍すること」であり²⁾、一般に、身体的、認知的、社会的、情緒的に良好な状態にあることを指す³⁾。この活動を行う中で、地域の方から「芸工展」という住民主権のイベントへの参加を招待された。そうして、移動式屋台によりケアの専門職と住民の対話の場を生み出すことを目的とした「モバイル屋台 de 健康カフェ」を2016年秋の「芸工展」に出展した。

屋台の活動は、屋台製作ワークショップと完成した屋台でコーヒーをふるまう活動に分けられる。屋台製作ワークショップでは、ケアの専門職の他に建築関係者をメンバーに巻き込み、街の路上で屋台を製作した。その様子に足をとめる地元住民や外国人観光客との偶発的な会話が起り、また地域の子供たちの製作活動への能動的な参加もあり、屋台製作という作業を通じて多世代にわたる関わりが生まれた（図1）。

屋台完成後は、地域活動に関心をもった総合診療医や多職種、コミュニティナース⁴⁾、医療系学生らが、約2週間の祭りの開催期間を通して代わる代わる屋台をひき、谷根千の各地を巡り、出会った人々にコーヒーをふるまいながら対話をするという活動

1. 東京大学大学院 医学系研究科 医学教育国際研究センター 医学教育学部門

を続けた。期間内にコミュニティナースが、モバイル屋台を訪れた人々の一部に実施した他記式アンケート調査の概要を表1に示す。

期間内に会った計200人以上の中の15人であるため選択バイアスがあるものの、20代から80代まで多世代の人々が屋台に関わったことが分かる。「病院は特殊で、嫌いなので、なかなか行かない」という人や、健康について特に困っていないという人なども含め、すべての人が「まちの保健室」のような場があれば行きたい、という回答をした。公的機関以外に、気軽に健康などについて相談できる場、



図1 東京「谷根千」地域でのモバイル屋台 de 健康カフェ

人のつながりが生まれる場を求めていることが分かった。

「屋台」という多くの人々の関心をひく仕掛けを用い、街中を歩きまわることで、偶発的なコミュニケーションが多く生まれた。健康に関心の高い人々だけではなく、普段は病院に来ることのないさまざまな住民と対話する機会が生まれた。対話の内容も屋台の思い出話や個人的な身の上話、谷根千地域の歴史、そして健康や病気に関する話と多岐にわたっていた。

③事例の詳細と成果：兵庫県豊岡市におけるモバイル屋台プロジェクト

兵庫県豊岡市で、医療系学生を中心とした健康プロジェクト「但馬ゆかりの医療系学生の集い」を行ってきた医学生守本陽一氏（当時、自治医科大学）は、無関心期の住民への健康介入が困難であるという課題を感じていた。そのような折、2016年秋に東京・谷根千での「モバイル屋台de健康カフェ」プロジェクトに学生の立場で参加し、地域住民と医療者のカジュアルな関係性に感銘を受け、2017年に豊岡市においても「モバイル屋台de健康カフェ in 豊岡」を行った。

屋台製作ワークショップは地域の拠点である映画

表1 コミュニティナースによるアンケート調査（2016年のモバイル屋台 de 健康カフェにて）

ID	年齢	性別	同居家族	健康についての困りごと	「まちの保健室」があったら行きたい？
1	30代	男性	一人暮らし	視力矯正の不具合.	行きたい. 公的機関と別のものがほしい.
2	40代	女性	同居者あり	特にない.	行きたい.
3	20代	女性	一人暮らし	腰が痛い. 寝られない.	行きたい. 病院は特殊で、嫌いなので、なかなか行かない.
4	60代	女性	同居者あり	高血圧. 健診に行くと不必要な治療をされないか心配.	行きたい. 気軽に自分のことを話したい.
5	60代	男性	同居者あり	全力で動けない. パワー不足.	行きたい. 自分でも体操の会をやっている.
6	60代	男性	同居者あり	不整脈が気になる.	行きたい. まちに保健室があれば人が集まる場所となる.
7	60代	男性	同居者あり	関節が痛い.	行きたい. 面白い.
8	50代	女性	一人暮らし	更年期の症状.	行きたい. 安心感を支えると思うし、そこをきっかけにつながりが生まれると思う.
9	20代	男性	一人暮らし	尿酸値が高い.	行きたい. 人のつながりを作ることができる. 病気の予防につながる.
10	60代	女性	同居者あり	体力の低下. 仕事がしたい.	行きたい. 地域のつながりが良くなる.
11	50代	女性	同居者あり	体力の低下. 処理能力の低下.	行きたい. 健康の支えになると思う.
12	80代	女性	同居者あり	老眼.	行きたい. 入りやすい場を作ってほしい.
13	80代	女性	一人暮らし	訪問看護がときどき家に来るが、必要性が分からない.	行きたい.
14	50代	女性	同居者あり	最近、骨をよく折る.	行きたい. 以前、不眠症から「薬漬け」にされたことあり、相談できる場所がほしい.
15	20代	女性	不明	ダイエット何度か経験あり、内臓が心配.	行きたい. 婦人科系の悩みなど、普段相談できる人がほしい.

館豊岡劇場前の駐車スペースで行い、通りかかる方々と一緒に製作した。屋台の側面には交流のための黒板を設置した。

屋台を用いた活動では、医師、看護師、医学生、看護学生等で屋台をひいて、街中でコーヒーをふるまい、健康診断未受診者や医療から疎遠な学生など、多くの年代の住民との対話をする事ができた(図2)。

スタッフの振り返りからは、医療者の学びとして、「地域を知ることができた」「医療から疎遠な人と出会えた」「医療者同士がつながる場だった」などが挙げられた。モバイル屋台を用いた活動は、住民への健康相談機能に加え、地域住民と医療をつなげる機能、医療者同士をつなげる機能といった「小規模多機能」な役割があると考えられた。

④今後の展開

東京および兵庫でのモバイル屋台de健康カフェの実践は、いわば打ち上げ花火的に行われた活動であったため、今後どのように継続的に行えるかが課題である。また費用をどう捻出するか、継続的に行う場合の運営母体やマンパワーをどう確保するかといった課題も挙げられる。しかしながら、コーヒーやお茶といったカジュアルさを媒介にして、健康にあまり関心のない地域住民に対してもアプローチできるツールとして、モバイル屋台は大きな可能性を秘めている。

2. 考察

①モバイル屋台による健康生成ダイアログ

屋台を起点として発生したコミュニケーションは「健康生成的なダイアログ(対話)」と言える。そこでは、問題に焦点を当てたアプローチではなく、屋台に関心を持った街ゆく人と医療者がゆるくつな



図2 兵庫県豊岡市でのモバイル屋台 de 健康カフェ

がり、世間話の延長で健康をめぐる対話が偶発的に発生していた。健康生成論(salutogenesis)とは、人の健康は健康要因(salutary factors)に支えられているとする考え方で⁵⁾、ウェルビーイングの概念とも関連がある。また、モバイル屋台による活動では、いわゆる「健康無関心層」の人々となりがやすくなったり、多世代が交流しやすくなったりする。

モバイル屋台をめぐる発生したダイアログの例をいくつか、フィールドノートから抜粋する形で紹介する(表2)。

いずれも会話のきっかけは、健康・医療そのものではなく、屋台に対する興味や、コーヒーを飲むという日常性から発生しているのが分かる。そこから疾病中心ではない、健康あるいはウェルビーイングをめぐるダイアログが発生しているのが見て取れる。

こうした多面的な作用を持つモバイル屋台の強みを一言で表すならば、「小規模多機能性」であろう。「屋台」という装置が、コミュニケーションの磁場となり、日常会話が発生するとともに、健康をめぐるダイアログが生まれ、またコーヒーを飲みながらリラックスできる場所ともなる。子供たちにとっては遊び道具となり、大人たちにとっては憩いの場となるのである。こうした「小規模多機能」な場は、昔ながらの「銭湯」や「路地」が地域においてそうした機能を果たしてきたが、それらが徐々に失われていく中で、今後「モバイル屋台」のような代替的な場がいよいよ必要性を増してくるであろう。

②総合診療医の専門性とタスクシフティングの可能性

モバイル屋台の活動は、一見医師がやる必要がない、あるいは医師以外に適した活動のように見えるかもしれない。しかしながら、今後総合診療医が地域住民のニーズをくみ取りながら、地域に密着した活動を展開していく場合に、こうした活動が重要となってくると思われる。ふだん、病院や医療機関の中にしかおらず、地域の中では「見えにくい」存在である医師が、こうして地域に「顔を見せる」ことで、地域住民とのパートナーシップが深まりやすくなる。総合診療医の専門性に「地域志向性アプローチ(Community-Oriented Approach)」がある。このアプローチでは、地域住民のニーズを把握しながら、地域の健康課題を探り、地域と協働し問題解決に当たることが求められる。モバイル屋台によるアウトリーチ活動は、そうした地域志向性アプローチの発展版として、総合診療医の専門性を十分に発揮でき

る活動である。

また、この活動によって地域で活動する多職種（訪問看護師、保健師、薬剤師など）とも連携しやすくなり、地域包括ケアにおける連携協働が促進される可能性がある。一見、遠回りに見えるこうした活動を総合診療医が積極的に行うことで、結果として、地域住民や多職種とのパートナーシップが深まり、地域包括ケアが円滑に動いていくであろう。

③医療や社会に与えるインパクト

上記に記述したような、地域包括ケアにおける住民とのパートナーシップ形成や多職種連携協働に与えるインパクトは大きいと思われる。また「コーヒー」や「屋台」というカジュアルさは、一見医師という固い職業とはかけ離れたイメージであり、そうしたステレオタイプなイメージを打破する効果もあると思われる。「屋台でコーヒーをふるまう医師」、

「街の屋台で健康相談ができる医師」という、総合診療医にとって新たなアウトリーチ活動のモデルとなる可能性がある。

④他の地域での応用可能性

都市部におけるモバイル屋台活動は、人通りが多いため、比較的短い距離の移動で多くの人にアプローチできるという利点がある。一方、地方でのモバイル屋台活動では、人通りの多い場所を選んで展開する必要がある。兵庫県豊岡市での実践が成功したことで、東京のような都市部のみならず、地方都市でもこのモデルが機能することが実証された。地方都市であれば、さらにその地域の強み・特徴を応用した活動が考えられる。紙芝居や人形劇とのコラボレーション、地域の特産物を屋台に載せて回るなど、さまざまな可能性が考えられる。そのようなコラボレーションを積極的に行えば、健康にはあまり

表2 モバイル屋台をめぐる発生したダイアログの例

日時	場所	フィールドノートからの抜粋
2016年10月10日	文京区根津	屋台を見て話しかけてきたMさんという男性。「屋台を医療従事者がひいて健康話にのってコンセプトいいですね!」と、賛同してくださる。この辺に住んでいるという。また、カフェに入ろうとしたベビーカーに幼児を乗せた若い夫婦と話をする。……やはり、モバイル屋台で、地域の健康づくりをしているという話をすると、大変関心を示してくださった。「面白いことやっていますね」と。
2016年10月12日	台東区谷中	朝日湯（銭湯）の前に来た。ここで一旦停泊しようということになる。お風呂に入っていくお客さんに「珈琲飲めますよ〜」などと声をかけると、興味を持つ人が少しずつ出てくる。ちょっと立ち止まる人も増えてきた。地元の方という白髪まじりの60〜70代の女性。「これなあに?あ〜、芸工展の企画でやってるの?」と、興味深げな顔で立ち止まってくれる。今日、実質的に最初のお客さんだ。珈琲をまずはさしあげる。「今日はお坊さんと医者です」と説明すると、さらに驚かれる。Yさんと仏教の話で盛り上がってるようだ。そうこうするうちに、他の方もどんどん立ち止まるようになる。
2016年10月15日	台東区谷中〜文京区根津	谷中の通りを歩いていると、オランダ人の女性が話しかけてきた。「これは何をしているの?」と聞くのでコンセプトを説明すると、建築と都市デザインの大学の先生だったらしく、とても興味を持ってもらった。「面白いことしてるね」と。珈琲も飲んでもらい、一緒に記念撮影。さらに、藍染大通りに行くまでに、若い大学生の女子2人、おばあちゃん1人にも珈琲をふるまう。最初に「なんだこの屋台?」と不思議な顔で見ていた人たちも、「珈琲のめますよ」と声をかけると、立ち止まり、中には説明するとモバイル屋台のコンセプトを理解してくれて、共感してくれる人がいるのは嬉しい。
2016年10月16日	台東区谷中	谷中に住んでいる地元のIさん夫婦とその子供たちもモバイル屋台に立ち寄ってくれた。Iさんが言う。「やっぱりこれいいですね。特に無料で珈琲をふるまうのがいいよ。これはやっぱり無料でなくっちゃ。こういう風に人が集える場所、居場所を作っているのがすごくいいと思う」との言葉をいただき、本当に感動する。うれしい。
2016年10月18日	文京区根津	自転車にのった地元のおっちゃんたちが話しかけてくる。「これ自分たちで作ったの?すごいねえ」と、やたら陽気だ。あとで聞いたところ、根津町会の人たちのようだ。根津生まれで、今回自身も芸工展に出しているMさんが立ち寄ってくれる。さっきのおっちゃんが「おう、Mちゃん」と声をかけている。

関心のない住民にもアプローチしやすくなる。今後、全国のさまざまな地域でモバイル屋台の活動が応用発展することを期待したい。

文献

- 1) 孫大輔. まちけん－谷根千まちばの健康プロジェクト. 東京：谷根千まちばの健康プロジェクト（まちけん）；12 Mar 2018. [not revised; cited 14 Mar 2018] Available from: <http://www.ynsmachiken.net>
- 2) Seligman MEP. Flourish: A Visionary New Understanding of Happiness and Well-being. New York: Simon and Schuster; 2011.
- 3) Bornstein MH, Davidson L, Keyes CL, et al. Well-being: Positive Development Across the Life Course. Psychology Press; 2003.
- 4) 矢田明子. コミュニティナースとは. 島根：Community Nurse Company（株）；10 Mar 2018. [not revised; cited 14 Mar 2018] Available from: <http://community-nurse.jp/cn>
- 5) アーロン・アントノフスキー. 健康の謎を解く：ストレス対処と健康保持のメカニズム. 第1版. 山崎喜比古（訳）, 吉井清子（訳）. 東京：有信堂高文社；2001. 3-18.